

## 作家・里村欣三と創価教育学会

高 崎 隆 治

### 里村欣三という作家

大正の終りから昭和初期にかけて、里村欣三という作家がいました。

正確に言うとも大正リベラリズムの末期から昭和の軍国主義時代の全期間になるわけですが、ある事情・問題から、戦後六十年以上の今日まで、ほとんど無視され葬られてしまいました。それどころではなく、その行動が誤解され曲解されたまま現在に至ったといつて過言ではありません。したがって、近・現代文学の研究者は何万というほどいても、里村を研究する者は誰もいないというのが実情です。

里村欣三はしかしこの国の研究者たちから忌避され無視され、その上さらに非難されるような作家ではありません。むしろ、あの狂暴な戦争下に自己の信念を貫き通そうとした稀れな作家なのです。

平林たい子という女性作家がいました。大正後期から戦後にかけて活躍した人で、当時、女性作家の中では五本の指に入るほどのすぐれた人です。

戦争が終った直後、その平林が里村について書いた文章があります。それは『たい子日記抄』という単行本に載っています。平林がなぜそれを書いたかと言うと、里村欣三は昭和二十年の二月に、フィリピンのルソン島で、南方戦場に赴いた多くの作家の中のただ一人の戦死者になってしまったからです。

「旧友里村欣三の“苦力頭の表情”をよみかえして不覚の涙が頬を伝うのを覚えた。奪いかえすこともやり直すこともできない二十年の歳月よ。その波瀾多い年月の間に作家の里村は生れて死んだ。今はただ古い塚のように六つ七つの作品が残っているだけで草ぼうぼう、足をとどめてここに里村ありしと吊ってくれるものもない……」

平林と里村の関係は、昭和の初めに興隆したプロレタリア文学運動の大きな流れの中で、対立した二つの流派の一方の雄とされた「文芸戦線」の仲間——というよりは思想的な同志の間柄だったわけです。

プロレタリア文学は、もう一方に「戦旗」派とよばれる集団があつて、端的に言えば、これは

---

Ryuji Takasaki (戦時文学研究家)

\*本稿は、創価教育学研究会11・18記念講演会での講演「作家・里村欣三の謎」(2007年11月16日)に加筆・訂正をしたものである。

共産党系の団体ですが、里村の方はそれと思想的に対立する労農党系の集団です。この二つの集団は、思想的にも、また文学上の方法論の面でも鋭く対立し、共に相手を敵よばわりしたのですが、里村たちの仲間には他に黒島伝治・前田河広一郎・葉山嘉樹・岩藤雪夫などがいました。

文学運動は政治運動と相似する面があって、「昨日の敵は今日の友」と言うか、「文芸戦線」派の作家が「戦旗」派になったり、またその逆になるなど、一人の作家を一概に何々派とくくるとは大変困難なわけですが、里村と平林は、平林の夫の小堀甚二も含めて、終始「文芸戦線」から離れず、したがって文学的・思想的同志としての人間関係を失うことがなかったわけです。「文芸戦線」の同人の中ではもっとも気が合っていたわけですが、それは平林も里村も、動機は違っているとも二人とも旧「満州」へ逃れたり放浪したりした経験の持主であった点など、性格的にも類似する点があったと思ってさしつかえないでしょう。むろん、二人は放浪の時点では面識もなく、時日はずれています。

里村欣三が日本を脱出したのは大正十年の頃で、旧制中学を中退し、十代の若さで労働運動に参加したりしていたのですが、平林の言うところによると、徴兵で軍隊に入って間もなく脱走して満州に渡ったということになっています。彼女がそれを知ったのは「文芸戦線」の同人として知り合った後のことですが、ある日、夫の小堀甚二から、人には絶対にしゃべってはならないと口止めされたと言います。里村を脱走兵だと言うのは小堀と平林だけで、里村自身も自首後に自分は徴兵忌避者であると言い脱走兵だとは言っていない。仮りに里村が脱走兵だとしても、自首後の軍法会議で徴兵忌避という決定を下された以上、決定を否定するわけにはいかないでしょう。したがって、脱走兵ということはその証拠がないかぎりそうときめつけることができません。しかし、だからといって徴兵忌避を全面的に肯定もできないのです。というのは、里村が自首をする直前、彼は叔父に連絡をつけて自首の相談をしています。叔父は陸軍主計少将という高官で、里村の自首に関して、最善の方法を考え出したのではないかと想像されるのです。これが下司のかんぐりであれば幸いですが、速断はできない問題にちがいはありません。したがって私は、里村の過去を、彼自身の言うように徴兵忌避ということにしておくことにしました。もちろん、徴兵忌避が間違いということになれば訂正にやぶさかではありません。しかし、もはやその件は永久に謎として残されるでしょう。

ところで、彼は満州に渡ってなにをしていたか。徴兵忌避にしても脱走兵にしても、もし彼がどこかで彼を知る者に会ったなら、その口から所在が知れてしまう危険があります。当時、満州には万を超える日本人がいたし、日本の官憲も少なからず潜入していたから、うかつに日本人に接することは出来ないわけです。身体頑健という以外、手になんの職も持たない彼は、肉体労働をする以外にないのですが、日本人社会の危険を知る彼は、中国人社会の中に入るほかはありません。里村が町で日本人に出会うたびに逃げ出したくなるのは当然だと思います。つまり、生きるためには可能な限り日本人の少ないところや居ない町に行く以外にないのです。

里村は、したがって危険を感じるたびに居所を変え、次第次第にソビエト領に近い北方へ行くことになってしまいました。ハルピンやチチハルや、そこにいたかどうかはわかりませんが、国境間近のチタなどを転々としました。長春より北はほとんど日本人などいないのですが、里村が

もっとも怖れる憲兵は国境の村にも日本人であることをかくして潜入していました。このころ、そんなところにまで私服の憲兵が入り込んでいたというのは私の想像ではなく、事実その一人であった私の縁者から直接聞いた話です。

しかし、中国語（満州語）を話すことも自由にはできない里村（後に昭和の初め、中国の国民革命軍に参加しようと上海へ密航した彼が、片言の満州語を話すことで満州軍閥のスパイではないかと疑われ、命からがら日本へ逃げ帰ったことがあります、ここでのその件は省略します）は、簡単な日常語——それもほんの僅かな言葉を知っていればあとは体力だけという重労働者の仲間に入り、苦力とよばれる中国人の最低の生活を送っていました。ところが、大正十二年九月一日、関東大震災が起きて東京はむろんのこと、関東地方の都市が全滅したという情報が里村の耳に入ってきました。同時に、日本には革命運動が起きて左翼が政権を握ったというニュースも伝わってきました。うわさは満州の日本人の口から中国人にまで広がったわけです。

里村が帰国を決意したのはその時で、革命運動が起きたなら、自分の徴兵忌避も帳消しになるし、むしろ帝国主義・軍国主義の抵抗者として歓迎されるだろうと思ったわけです。

関東大震災が、満州居住の日本人の間に大げさに伝わったということもあるが、一方に里村の帝国主義に関する認識の甘さがあったのも事実でしょう。

仲間の中国人の苦力たちは里村に餞別をくれて別れを惜しんだのですが、後年、「満州事変」が起きた時、満州の苦力仲間を心配した彼は、「文芸戦線」の友人たちの反対を押し切り雑誌「改造」の特派員として満州へ行った。そのことも里村が誤解される原因の一つですが、その時、里村がなによりも憎んだのは、満州の苦力たちの生活を、より悲惨なものにしている満州軍閥への怒りでした。だが、その満州軍閥と戦っているのは日本軍であったことが、客観的には里村を軍国主義者と誤らせる原因ですが、その問題にはこれ以上立入らないことにします。

## 報道班員として南方戦線で戦死

しかし里村が決定的に曲解され非難されるのは、もう少し後の太平洋戦争下の行動で、私自身も二十年ぐらい前までは、行動の一部分について誤解していた面もあります。

その問題について説明したいと思うのですが、周知のように、太平洋戦争が開始された昭和十六年十二月の直前・直後に、多くの文学者たちが南方戦場に動員されました。これはナチス・ドイツのPK部隊（宣伝隊）をまねたもので、身体的な虚弱者を除いた三十代四十代の、いわば中堅作家や評論家・詩人たちが徴用されたわけです。

徴用というのは、徴用令という戦時法令に基く強制的な動員で、徴兵と同じく拒否することはできません。兵士の召集は赤紙とよばれたが徴用は令状が白なので白紙と言われました。

作家のほかにもカメラマンや新聞記者などがいたわけですが、彼等は南方戦場のビルマ・フィリピン・マレー・ジャワなどに分けられて報道の任務についたわけです。

里村欣三はこの時、井伏鱒二や寺崎浩・小栗虫太郎・海音寺潮五郎などとマレーに派遣されました。ついでに言うと、ジャワ方面には武田麟太郎・阿部知二・北原武夫他数人、フィリピン方面は石坂洋次郎・尾崎士郎・今日出海・火野葦平・上田広ほかで、またビルマは山本和夫・榊山

潤・高見順・小田嶽夫ほかというわけです。そのほか海軍関係には石川達三や海野十三・丹羽文雄・村上元三・山岡荘八などがいました。

これらの人には、第一次徴用の開戦直前と、直後の第二次の別がありますが、さらにその後の者を加えると総計では文学者だけで五十名を越えます。

ところが、どうしてそういう論理になるのかまったく理解に苦しむのですが、戦争が終った時、徴用されなかった者を中心に、戦争協力者として被徴用者を非難する風潮が起きました。前にも述べたように徴用を拒否することはできません。兵役と同じです。そこで思い出すのですが、今から三十年ほど前、大学紛争の盛んな時、突出した学生たちが、私ども戦時下の学徒兵を、なぜ銃を執ったかと攻撃しました。学徒の大部分は、私もその一人ですが、進んで志願したものではありません。強制による義務としての兵役で、言ってみれば「銃を執った」ではなく「執らされた」ものたちです。もちろん、志願した者もいます。徴用作家の中にも志願した者がいるし、名前は言いませんが、志願したけれど当局に拒絶された者もいます。主としてそれは身体的な健康問題ですが、学徒の場合も、たとえば三島由紀夫のように「即日帰郷」となった者も少くはありません。兵役を免れた者ほど軍国主義思想が強いとはだれの言葉か忘れましたが、徴用文学者を非難する者にも、それと共通する感覚的感情的ななにかがあるように思われる気がします。

それはそれとして話を進めますと、里村欣三はマレーに向う輸送船の中で、指揮官の大佐を怒鳴りつけるようなことをしてしまいました。里村がマレー派遣軍によって身分上の差別を受けることになったのもそれが原因と考えられますが、このことだけでも里村が熱血的な正義観の持主だったという証明が得られます。結果として里村は、他の作家たちが高等官待遇であったにもかかわらず、彼は判任官待遇（軍隊の下士官と同じ）にされてしまいました。船中でのこの時の事件では、もう一人寺崎浩という作家が下士官待遇にされた上に、一人だけ仲間からはずされているのですが、里村はその寺崎を護るような役目を演じたことで指揮官やその取り巻きに睨まれたわけです。

## 里村はなぜフィリピンへ行ったか

戦争の末期——昭和十九年十一月、里村は軍の要請で作家の今日出海とフィリピンへ飛びました。

実はこの時、里村たちのほかに、火野葦平と日比野士郎という作家がいるのですが、彼等は台湾まで行って、台湾軍の司令部からフィリピンなどもはや行けるような状況ではないから内地へ戻れと命じられました。二人は素直に引き返したのですが、一日・二日遅れて台湾に飛んで来た里村と今は、内地へ戻れと言われても帰らなかったのです。

昭和十九年の末といえ、もう日本の敗北は必至とみられる状況で、フィリピンのレイテ島にはアメリカ軍が上陸し、日本軍は人間性を無視した特攻戦術を行って米軍の艦船を攻撃していました。その戦果はほとんどなかったのですが、特攻機はむろん、それを援護する戦闘機も底をついた状態でした。一方、フィリピンへの日本の艦船は、台湾とフィリピンの間のバシー海峡で潜水艦による攻撃を受け、兵員も武器弾薬も無事には目的地まで行けない状態でした。

台湾軍司令部は、里村たちも火野と同様、素直に戻るだろうと思っていたのですが、里村は「絶対に帰らない。いや、帰るわけにはいかない」と、テコでも動かない態度をとりました。

この時の里村の言い分はこうです。

「われわれは陸軍省の命令でここまで来た。しかし、陸軍省が戻って来いと言うなら戻るが、台湾軍司令部が戻れと言っても、それは命令違反になるから戻るわけにはいかない。」

帝国軍隊の論理としては当然こうなります。直属上官の命令は天皇の命令で、下級者は、いかに相手の階級が上でも直属上官以外の者の命令に従うことはできないのです。司令部は怒って「それなら勝手にしろ」と言ったわけです。

里村はどうか——飛行場をうろついて何人かの操縦士に頼んでみたが拒否された。ところが、彼が第一次徴用の時に、ボルネオとシンガポールを連絡していた軍属の操縦士がいるのを見つけた。彼がボルネオ軍に転属する時に乗った輸送機のパイロットです。フィリピンへ渡ろうとしている参謀の一人と里村が必死に説得した結果、護衛の戦闘機がついてくれるならという条件で操縦士はやっと承諾した。戦闘機は燃料がたりないということで、途中で引き返したが、里村と今は無事にルソン島のクラーク飛行場に着陸しました。そのころ飛んでくるのは米軍機ばかりだった飛行場は、米軍の飛行機と勘違いをして大騒ぎをしたようです。

一方、マニラの報道部は、里村の着任の申告を受けつけず、部長は形相を変えて「直ちに帰れ、今のルソンは明日にでも米軍が上陸してくるかもしれないような状況だ。陸軍省は寝呆けているのではないか。」と怒った。しかし里村は少しもひるまず「米軍が来たら銃を執ります。自分は三年近く中国戦線で戦ってきました。決して足手まといにはならない。しかし今君は軍隊経験がないので、今君だけ帰して下さい。」と懇願した。その覚悟ならということで、部長の大佐はようやく承諾したが、しかし今日出海は里村に「死ぬ時は一緒に死ぬ約束ではないか、なぜ俺だけ帰れと言うのか」と怒った。里村は平謝りに謝まって、「いまならまだ大丈夫だから帰ってくれ」と頼んだ。

里村と今がルソンへ渡った経緯は以上のような次第ですが、このことが里村を軍国主義者と断定される決定的な理由となったわけです。

たしかに、これだけの話を聞いたなら、私も里村を軍国主義者ではないかと疑います。だが、もう一度繰り返せば、彼は決してそういう人間ではないのです。なぜそうなのかということについて話せば、おそらく二・三時間は必要と思われるから、ごく簡単に言います。

里村の終局の目的は、フィリピンではなかったのです。

フィリピンの南西にボルネオがあります。フィリピンは大小八千に近い島々から成り立っていますが、その島を次ぎつぎに渡って行くと、最後に細長い形をしたパラワン島に行けます。パラワン島はスルー海に面した島ですが、最南端からは海峡を隔ててボルネオ島が見えます。私は行ったことがないので、確かなことは言えませんが、カヌーのような小さな舟でも渡れるだろうといわれます。実は、里村の目的地はそのボルネオであり、島の東北端には日本人にも知られてい

るサンダカンの町があります。サンダカンがなぜ有名なのかは省略しますが、里村の最終目的地は、ボルネオの奥地からサンダカンに向って流れるキナバタンガン河の上流地域と判断されます。

## 紀行『河の民』

昭和十六年の末、つまり、太平洋戦争開始の直前から直後にかけて、多くの文学者たちが徴用され南方へ派遣されたことは前に述べたが、徴用期間は一年でした。しかし、実際には派遣地域によって異なり、大部分の者は十七年の末に日本へ戻ったのですが、たとえばジャワ派遣軍に属していた武田麟太郎は翌年になっても戻って来ないので、武田はジャワで鰐に喰われたらしいなどというわさが立ったりしました。里村も十七年には帰らず、十八年の春ごろ皆より遅れて帰還しました。

里村がなぜ遅れたかと言うと、彼は武田とちがい、帰りたくないといって勝手にそうしたのはなく、実は当初、マレー派遣軍に配属されていた時、正確には昭和十七の秋、ボルネオ派遣軍に転属になったのです。里村のほか堺誠一郎が一緒でした。

なぜ転属になったのか、理由を簡単に言うと、シンガポール占領後のある日、派遣軍の軍司令官（山下大将）が報道部にやってきたことがあった。その時、居合わせた文学者の中で、井伏鱒二だけが、敬礼もせず煙草を吹かしていたのだそうです。司令官は立腹し、あのような者は必要ない、内地へ帰してしまえと言ったわけです。戦後、井伏が山下將軍をけっしてほめないのはそういう理由からですが、この時、マレー軍報道部は、井伏と小栗虫太郎の二人を、以前から要請のあったボルネオ派遣軍に転属させることにしたのです。

ところがその時、会議のためボルネオから司令官の前田中將がシンガポールにやって来ました。前田中將という人は、軍部の中でも最も文化に関心の強い人ということで有名な將軍ですが、帰還作家のほとんどすべてが参加している文化奉公会という団体の会長で、里村も堺も会員の一人でした。里村はその奉公会の会合で前田中將にあったことがあり、中將が里村の『第二の人生』を読んだというので、加賀百万石の後裔である中將を非常に尊敬していたのです。

里村と堺はチャンスとばかり、中將が宿泊しているホテルへ行って、井伏と小栗の代りに自分たち二人を転属させて欲しいと頼んだわけです。念のために言うと、一介の徴用作家が、予約もなしに軍司令官に面会を求めるということは常識外の行為で、普通ならたちまち追い返されるはずですが、前田中將という人は、やはり噂どおりの人であったようです。中將はすぐフィリピン軍報道部に電話し、その場で二人は転属許可を得たわけです。前田中將（後に大将）はその後、里村がボルネオに赴いた時、事故で死去しました。里村がそれを知ったのはサンダカンに到着した後です。

里村はボルネオでキナバタンガンの上流地域を探検する任務につき、堺はキナバル山中の調査を任務としたのですが、地理的理由で二人は途中から別々の行動をとることになりました。里村に同行したのはカメラマンと通訳の二人ですが、里村が初めてボルネオでフィリピンを意識したのは、ボルネオのクチンからサンダカンに向う連絡船の中でした。というのは、船がサンダカンに近づいた時、船員の一人が、はるか彼方に見える島影を指し、あの島はフィリピンで、バタア

ンの砲撃戦の時にはここまで砲声が聞こえたと言ったわけです。里村は著書の『河の民』の中で、フィリピンはそんなに近いのかと驚いたことを記しています。しかし、いくらフィリピンがボルネオに近いといっても、ルソン島のバタアン半島の砲声が聞こえるほど近い距離ではありません。おそらく船員は、雷鳴を砲声と聞き違えたのでしょう。だが、この時の船員の言葉は里村の心に強烈なイメージを刻みつけてしまったのです。里村はある意味では非常に単純な思考の持ち主で、それは彼の長所でもあり欠点でもあるわけですが、言いようによっては純粹と言えるかもしれません。が、そのことがやがて里村の運命を決定づけることになるうとは、むろん里村も気がつきませんでした。しかし、その詳細についてはここでは言わないことにします。

サンダカンに着いた彼は、そこの警備隊にキナバタンガン探検の命令書を見せて許可を求めました。ところが警備隊は、船は途中までしか出せないと言い、さらに、丸腰で行くつもりで里村に、軍刀と拳銃は持っていき、必要なら小銃を貸してもいいと言ったのです。里村は武器などいらないと主張したが、それでは探検を認めないと強硬な態度を変えなかったそうです。警備隊が里村に明らかな非協力的姿勢を見せたのは、どうやら前田中將の飛行機事故を把握していたのかもしれない。しかし里村は、警備隊の主張にひるむような人間ではなく、それなら武器を持って行きましようと言い、ひそかに自分の軍刀と拳銃をサンダカンに置いていく荷物の中にかくしてしまっただけです。なんとも大胆な行為ですが、里村は二年半の中国戦場で、“軍隊は要領”ということを骨身にしみて味わってきました。つまり、表面は服従したような恰好をして本心は決して命令など守らない、古参兵がやる手を使ったわけです。『河の民』の中で彼が書いているように、軍隊組織の中での自分はその一員だが、いったん組織を離ればただの旅行者であるという意識を持っていたわけです。

だが、里村に武装を命じた警備隊にもそれなりの理由があったように思われます。

当時、一般の日本人はボルネオ島に関する知識をほとんど持っていなかった。むしろ、でたらめな情報ばかりが伝えられていたと言っても過言ではありません。ボルネオの奥地には人食い人種がいるとか、猛獣・毒蛇がいるし、おまけに得体のしれない疫病、それも命にかかわるような恐ろしい病気の巣窟だとかいった話です。病気というのは、おそらくデング熱のことだと思うが、デング熱は南方地域のどこにでもある病気で、ボルネオだけの話ではないし、猛獣はワニぐらいのもので、オランウータンも猛獣とは言えない。人食い人種にいたっては何百年も前にあったかもしれない作り話です。猛獣・毒蛇どころか里村は奥地の住民たちから大変な歓待を受けました。

警備隊はしかし、里村たちが行く数か月前に、一箇小隊ほどの重装備をした兵士たちがかなり奥地まで偵察に出ています。だが、彼等は住民をまったくの未開人・野蛮人と考えているので、部落には足を踏み入れず、船の中で寝泊まりして、住民との接触を避けてました。これではなんのためにそんな無駄なことをしたのかということになるが、結局はボルネオという島への先入観がそうさせたものと思われます。

里村たちが歓迎された理由は、何一つ武器を持っていなかったからです。そのへんの里村の考え方を、『河の民』の一節から引用します。

「私は武力の背景をもたず、また征服者の誇りを捨ててしまっ、一放浪者として人間的に交際し、友達になってみたいと考えて、こんどの旅行に出てきたのである。私のそんな考えが通用するかどうかを試みても、この旅行の目的の一つであった。彼らがつけ上ってもいいし、時と場合によっては、私たちが彼等の苦力になってもいい、私はそんな風に考えている。食糧が無くなれば、私は土民の小屋から小屋へ、食物を乞いながら、彼等の人間的な感情に縋って、この旅をつづけなければならないことがあるかも知れないと、出発の時から秘かに覚悟していた。私の旅行は、ジャングルの中に棲む未開人たちの人間味の探求である。苦力がつけあがる、それも私の研究題目の一つだ！私の親切に対して、彼等が裏切者——それも素晴らしい人間研究ではないか！」

この部分は、あえて書くつもりはなかったと思われるが、どうやら一緒に行ったカメラマンなどの武器についての意見の相違から腹を立てて書いたらしい。こういう考えのもとで、未開の山の中に入るといふこと、これはよほどの信念・よほどの決意がなければできないことです。もしこれが里村ではなく私だったら、いかに金を積まれても御免をこうむります。あるいは、護衛の兵隊が百人ぐらいいなければとてもできるとは思われません。

里村にとって、このボルネオ奥地での生活は、これまでの四十余年の人生の中で、他のなにもにも代え難いほどの自由で楽しい毎日だった。たしかに、奥地での生活は、苦しいことも辛い日もあった。それは食べ物のちがいか天候の具合いかさまざま問題だが、満州での放浪生活や中国戦場の苦労にくらべれば、むしろぜいたくと言えるほどの日々だった。しかし、なによりも彼が毎日を楽しく愉快に送れたのは、彼を監視したり命令を下したりする者の存在がどこにもなかったということでした。キナバタンガンの上流の、かつて日本人がだれも踏み込んだことのない部落では、別れを告げる里村たちを部落総出で見送ってくれた。里村は手を振り日本語で何かを叫んだ。何を言ったかはわからないが、私の憶測では、もう一度必らず来るとも言ったのでしょう。

### 里村は軍国主義者ではない

里村は奥地から無事にサンダカンへ戻ってきた。しかし、その時、行方不明が伝えられていた前田中將は事故死であると確定していた。里村は落胆し呆然とした日を送った。というのは、前田中將の死が伝えられると、里村に対する警備隊の態度に明らかな変化が出てきたからです。南方軍から、徴用作家たちに帰還命令が出て、全員シンガポールに集合せよということが伝えられても、警備隊はサンダカンからの船は予定に組まれていないとか、クチンへの連絡船もいつ出るとかわからないと言い、里村に冷淡な態度をとったのです。里村たちの探検が前田中將の企画であり命令であることに警備隊は不満を抱いていたのでしょう。わざわざシンガポールから作家を招く必要はなく、そんなことは我々警備隊にまかせればいいのだと思っていたようです。念のために言うと、ボルネオ軍にも報道班はあったのですが、他の方面とちがひ、文学者は一人もいなかったのです。

従軍作家を、マレーをはじめ四つの方面に派遣しながら、ボルネオ軍にだけは一人も配属させなかった理由はわかりませんが、あえて推測すれば、それは前田中將が中国の戦場から帰還した



作家たちの文化奉公会の会長であり、多くの文学者たちから尊敬されていることに、こころよからぬ思いを抱いていた軍上層の一種の妬みがそうさせたように思われます。が、これはあくまでも推測です。

その間、里村は、日本で翻訳されたボルネオに関する『風下の国』（アグネス・キース著）の著者が住んでいた家を探したり、有名なカラユキさんで知られる女性たちの墓に花を供えたりなどしていました。

そんなことで、里村は二・三か月も遅れて帰ってきたわけです。しかしその翌年の夏、彼は報道部の要請で、今度は大陸打通作戦とよばれる衡陽攻略戦に、報道班員として従軍します。だが、そこで彼が見たものは、かつて日中戦争の初期に中国戦場で体験したものとまったく違った戦場風景であり悪鬼のような日本軍の様態でした。

というのは、日中戦争の初期には、甲種合格か、その次ぎの第一乙種しか現役兵ではなかったのに、第二乙・第三乙まで現役となり、軍隊には不適とされている丙種までも補充兵として召集されていました。兵士たちは戦闘参加以前の行軍途上で次ぎ次ぎに倒れ、食糧もなく畑の僅かな作物も根こそぎ日本軍に奪われました。報道班員の里村も同じことで、食べる物がなくて、普通ならだれも食べないし、食べられるものかどうかともわからない「へちま」まで食べました。

里村が日本の敗北を正確に認識したのは、この攻略戦の状況を見たからで、帰国後、ほぼ同じころにビルマのインパール作戦に従軍し、作戦の失敗を身をもって体験した火野葦平からその状況を知らされたことも里村に影響を与えずにはいなくなったようです。火野葦平は、敗退する日本軍と共に敗走をつづけたのですが、その体験は『激闘印緬戦線』（非売品）という標題の小冊子として昭和二十年の初頭に刊行されています。が、ここでは詳述を避けます。

火野がビルマ戦線に行き、里村が衡陽に行った時、内地では中等学校以上の学校が、通年動員ということで、事実上の休校となり、生徒たちは軍関係の工場へ総動員されていたのです。空いた校舎は徴兵年令を引き下げられた若者が、本土防衛の陣地構築を行うための兵舎になってしまいました。戦線だけでなく、いわゆる銃後の生活はさらに厳しいものとなり、都会での米の配給は途絶え、代りに高粱や脱脂大豆という飼料か肥料かわからないようなものが主食として配給されていました。

これはもう誰れが見ても末期です。本土空襲もすでに始まっていました。

そんな時——昭和十九年十一月の末、里村欣三に陸軍省情報部から、フィリピンの戦況が急迫してきたので、ルソンへ行ってもらえないかという連絡がきた。火野葦平・日比野士朗と里村の三人です。当初は三人の予定だったが、後からの決定でフィリピンを知っている今日出海も一緒ということになった。

十一月末といえば、牧口常三郎が獄中で亡くなった直後です。里村への要請は二十日ごろと言います。これは妹の華子さんから私が聞き出したことで、他に正確な日時についての証拠となる記録はありません。が、もしそれが二十日だとすれば、牧口常三郎の死の直後ということになります。里村はその時、東京に住んでいたので、十一月十八日の死去を知っていた可能性は極めて大きいと考えられます。

これは、あくまでも可能性の問題ですが、牧口常三郎の死を知っていたとすれば、そのことが従軍を承諾した重要な因子となったにちがいないと思われます。マレー戦線に従軍した時と違い、今度のフィリピン戦線への従軍は徴用ではなく要請なので、断れば断ることが出来るわけです。にもかかわらず、里村が従軍を承知したのはなぜだろうか。日本が、もはや敗北の寸前にまで追いつめられているのは、はっきり知っていたわけですが、尊敬する前田中将の事故死につぐ牧口常三郎の死は、おそらく彼に相当なダメージを与えたにちがいない。だが、里村は、それによって生きる希望を失ったわけではない。いや、むしろ、生きて生きて生きぬかなければならないと覚悟をきめたと考えるべきでしょう。だが、日本はもはや惨澹たる敗北を目前にしている。

里村欣三はこの時、いってみれば日本を見限ったものと思われる。日本軍が戦地・占領地でなにをしてきたか、里村はそれをよく知っている。

ここで、私的な余談を述べれば、軍需工場に動員されていた昭和十九年の秋、大学予科生であった私と仲間たちは、入隊が明日か明後日かという切羽つまった不安の中で、敗けたらどうなるかということを話し合ったことがあります。結論ははじめからわかっていて、「生きていれば兵士である以上、捕虜」であった。逃げ道はどこにもなかった。正直に言うと私は、「どうしても私を殺すつもりなら潔く死んでやる」と開き直る以外にはありませんでした。ことわっておけば、私を殺そうとしているのは敵ではなく日本と思っていました。

里村欣三は、困難に直面すればするほど、それにたち向う強烈な個性の持主です。その上さらに、無類の楽天主家ということで仲間うちでは知られていました。たとえば、マレーに従軍した時でしたが、前後左右に激しく砲弾が落下し、報道班員はみな必死に逃げたけれど、里村は闇夜であったため方角を間違え、森の中にとり残されました。近くに鶏小屋があったのでその中に入ったところ、砲弾が付近に落ちはじめたので逃げ出しました。翌日、昼になっても帰らない里村を、仲間たちは戦死したものだと思っていたが、ひょっこり戻ってきた彼は、呑気な顔で、「鶏小屋で寝ていたら砲撃を受け、鶏と一緒に逃げまわったが、鶏が戦死して俺は大丈夫だった」などと言い、また、来る途中で出合った将校に、「お前は臆病だから仲間にはぐれたんだろう」なんて、「あいつ本当のことを言いやがった」、と皆を笑わせて平然としていました。

里村はそういう男です。「潔く死んでやる」などとは決して思わないのです。師と仰ぐ人が死んでも、自分は生きなければならないと思う人間です。この時、戦争のない自由な世界に行きたいと考えた里村の脳裏に浮かんだのはボルネオでした。

里村欣三の作品の表面だけをみていたのでは、そのことは絶対にわからない。彼の行動についても同じことが言えます。だから、戦争末期の敗北が明らかになった時、好んでフィリピンの戦場へ行った軍国主義者ということになってしまう。文学はそういう単純な思考でわかるものではありません。

以上のようなことを、十数年前にある知人の編集者に話したことがあります。ところが、その人が言うには、話はよくわかったが、一つだけどうにも理解できない問題がある、それはフィリピンへ、「帰ろう」と言う今日出海をどうして連れていったのか、里村に別の目的があったのなら、台湾軍司令部も「帰れ」と言っているのだから、自分一人だけ行けばいいではないか、今日出海

を道づれにすることはない、と言われました。

そう言われると、私にも答えようがなかったのです。私もまた、それだけではどうにもわかりませんでした。しかし里村を、自分勝手な人間とは思えたくありませんでした。

それから二・三年、思いがけなくその謎を解く機会にめぐりあいました。里村のたった一人の妹（華子）にその故郷で会ったのです。

「里村さんと今日出海さんはそんなに仲が良かったのでしょうか」という私の問いに、彼女は「それほどでもなかった」と答えたが、さらに「フィリピンに行く時の台湾でのやりとりを考えると、兄弟のような関係にみえる」との私の感想を、彼女は再び否定し、「あの時は今さんが引率者だったのです」と言った。

瞬間、私は自分の身体を電流が突き抜けたような衝撃を受けました。傍らに彼女がいなければ、頭を抱えてその場にしゃがみ込まずにはいられないほどのショックでした。

戦争末期の速成の学徒兵とはいえ、私には軍隊経験があります。引率者と被引率者の関係は、知識というより身体でおぼえています。

「帝国軍隊」は、二人以上で行動する場合、必ず引率者がいます。引率は、階級が上か古参か否かで、同年兵の場合もどちらかが引率者です。被引率者は引率者の命令に従わなければなりません。ということは、台湾で今日出海が断固として「帰る」と言えば、里村は帰らざるを得なかったのです。しかし、フィリピンに到着してしまえば、引率・被引率の関係は解消し、二人の直属上官はフィリピン派遣軍報道部長の大佐ということになります。「今日出海君だけ日本に帰して下さい」と懇願することもできるわけです。

里村は、報道部長が怒鳴るほど事態が切迫しているとは思わなかったのでしょうか。陸軍省がフィリピンの状況を正確に把握していれば、彼等を派遣するはずはなく、また台湾軍は燃料の損耗にこだわって自分たちをフィリピンに行かせたくないのだ、という持前の楽天的な考えが手伝っていたにちがいないと思われます。しかし、状況は刻一刻変化していました。部長が今日出海だけ帰すことにきめた時、もはや台湾に飛ぶ飛行機はなかったのです。それどころか、ルソン島の飛行場には、帰国を切願する一般人が押し寄せていました。報道部長の帰国命令書を持つ今日出海さえも、飛ぶ飛行機がないのだからどうしようもないと断われました。

夕暮れに高速の偵察機が飛来したことがあります。それには高級参謀が一人乗っただけで、給油を終ると闇に紛れて飛び去りました。その日から半年近くルソンの山中を放浪した今日出海が、脱出に成功したのはまったくの偶然ですが、ここでは省略します。だが、どうしてもつけ加えなければならないことが一つだけあります。それは、フィリピンに到着し、部長に「帰れ」と言われながら、里村は今に、「一人で帰ってくれ」と頼んだ時です。今は「そんなに君は死にたいのか」と詰寄りました。だが里村は「俺は絶対に死なない。死にたくもない。だが……」と言って口をつぐんでしまった。今が「だが、なんだ」と「だが」以下の言葉を何度も追求したが、里村は頑として押し黙ったままだった。里村は、ボルネオに行きたいという真意だけはどうしても言えなかったのでしょうか。

## 創価教育学会との関わり

最初に述べましたように、里村欣三の研究者はだれもいません。戦後に再刊されたのは中公文庫の『河の民』（堺誠一郎解説）一冊だけです。しかし『河の民』は、戦争下に書かれた里村の作品の中では、もっともすぐれた紀行文です。あの戦争下によくこれだけ言えた、よく発禁にならなかったと思います。もっとも、彼には戦前に『苦力頭の表情』という代表作があるのですが、平林たい子の言うように、いまでは彼を弔ってくれる者はだれもいないというのが実情です。

数年前、『里村欣三著作集』（全十二巻別巻一）という本が復刻本として刊行されました。編集者は私で、別巻の『ボルネオの灯は見えるか』という作品は、拙著『従軍作家里村欣三の謎』を改題したものです。出版社は戦後の里村の知名度が高くないことから、採算のとれるギリギリの部数しか刊行しなかったのも、大きな図書館、つまり県立図書館か大学の図書館にしかないと思います。

ところで私は、里村欣三を、ほとんど100%に近いくらい創価教育学会の会員であると信じています。里村が日蓮正宗の信者であったのは、戦争下の彼の著作——たとえば『兵の道』でも容易に知れるし、他の著作でもうかがうことができます。しかしそれらのほかに、彼を創価教育学会と結びつけられる決定的な証拠があるのです。

ここに創価教育学会が発行していた『大善生活実証録』という小冊子のコピーがあります。「第四回総会報告」と書かれています。この中に「地方の便り」という欄があって、里村欣三が送ってきた「昭南島より」という見出しの手紙が載っています。昭南島とはシンガポールのことで、日本軍はそこを占領するや、勝手に名を変えてしまったのです。報道班員の里村は最前線のすぐ後を、自転車で追いながら南下しシンガポールに入ったわけです。この『大善生活実証録』は、昭和十七年の六月か七月か、そのころに出た冊子です。シンガポールを占領したのは二月で、先きに述べたように、里村が砲弾の落下する中を逃げ廻ったのはその直前でした。

ところでこの小冊子の里村の手紙にはこう書かれています。

「出発の際には盛大な壮行会を催して頂き、大変有難う存じました」（傍点引用者）

太平洋戦争開始の昭和十六年末は、日中全面戦争が始まって四年以上を経過しているので、国内の経済事情は、食料をはじめ日用雑貨の類まで相当に逼迫していました。たとえば、主食の米は、成人男子の配給が一日に二合三勺です。普通なら二食分にしかありません。しかも、その中には麦や高粱まで入ります。酒やビールもむろん配給だし薪や木炭や、なにからなにまで配給で、自由に買えるのは、たとえば通水性のない手拭や、一日で穴のあくステープルファイバー（スフ）の靴下ぐらいのものです。

いつかそういう話をしたら、野菜や魚は自由に買えたでしょうという質問を受けたことがありますが、残念ながら、野菜も魚も配給になっていました。

こんなことをなぜ言うかというと、そんな時代に、行く先きもさだかではない無関係の徴用者に「盛大な壮行会」を開く団体・組織が、はたして存在したかと言いたいからです。創価教育学

会の会員なるがゆえに、学会は学会主催の壮行会を開いたというのが、考え方として正当性を持つと、私は確信しています。ただその先きに「例の調子で大変無礼な振舞いに及び大いに御迷惑をかけたと思ひますが、どうかお許し下さい」という文がつづくことについて、疑問を抱かれるのではないかと懸念をします。これはまちがいなく里村が酒を呑んだあげく騒ぎまわったのでしよう。

里村の唯一の欠点は、相当な酒好きであり、呑むと、だれかれかまわず議論を吹きかけることです。呑まない時は口数も少なく、相手の話に耳を傾ける温和な性質ですが、呑むとたちまち激情的になるのです。南方へ向う輸送船の中で、指揮官に喰ってかかり、そのために下士官待遇にされてしまったのも、その時久しぶりの酒を呑んでいたと言われていています。里村自身はそういう自分の欠点をよく知っていて、あとで関係者に謝罪してまわったことは何度もあります。手紙の後半部分には、いっそう信心堅固に信仰しているとか、お題目とか御本尊の功德の広大さとかについて綴っているのですが、これは自重し反省していることを伝えたかったものと思われる。

### 名簿で確認できない理由

ここまで述べてきたことを総合的に判断すれば、おそらくだれもが里村欣三は創価教育学会の会員であると直感するでしょう。少なくとも、九十九％は確実と考えるはずです。もしそこまでの確信は持てないと言う人がいたら、それは私の語り方がまずいからで、御本人の責任ではありません。

私自身は、限りなく百％に近いと思っているのですが、私の近代文学研究の先生（片岡良一）は、簡単に結論を出すのを嫌う人なので、私も物事を滅多なことで断定するのは控えるようにしています。けれども、研究者のはしぐれとして、自らが課題とするテーマを中途半端で終らせるわけにはいきませんでした。思いあまった私は、もう二十年以上も前のことですが、ある人を通じて創価学会本部に、里村欣三（本名、前川二享）という人物は会員であったかどうかということ問い合わせました。ところがその返事は「会員名簿で確認できない」ということでした。私は、自分の判断が否定されたと思い、落胆と同時に大変な不満を覚えました。「そんなはずはない」と、心の中に何十回も繰り返しながら、前述の『従軍作家里村欣三の謎』を書いたわけです。従って、その本の中には里村欣三は創価教育学会の会員だとは書きませんでした。書かないということより書くことができなかったと言うべきですが、しかし、日蓮正宗の信仰者とは書きました。それだけは絶対にまちがいないからです。

一・二年たった後でした。「名簿で確認できない」と言うが、ひょっとするとその名簿は古い名簿——つまり、創価教育学会発足の昭和五年から昭和十三・四年ぐらいまでの間に編まれたものではないかと考えつきました。

里村が日蓮正宗を信仰するようになったのは、彼が中国戦場から帰還した昭和十五年のことだから、それ以前の名簿には里村の名があるはずがないわけです。そこで、もう一度、創価教育学会の名簿はいつのものなのか、里村の名がないというのは古い名簿ではないのか、と問い合わせました。

その返事は「名簿がない」でした。

私は、西尾実という日本一の国語学者（後に国立国語研究所所長）に教えを受けながら、「名簿で確認できない」を、名簿に名がないと受け取っていたのです。だがそれは、名簿に名がないのではなく、名簿そのものがないという意味だったのです。

私は大いに恥入り、しばらく（正確には数か月）本を読む気にもならず、また文章を書くこともできなくなりました。

まったく申しわけない次第ですが、西尾先生や片岡先生がもし生きていれば、これは謝って済むことではなく破門されても仕方のないことです。弁解をするつもりはありませんが、「名簿で確認できない」という言葉は、前述のように、どちらにもとれる表現です。「人生は誤解から成り立っている」という人がいますが、その原因はやはり言葉であると思います。もともと日本語は、あいまいな性質があり、時にはそれが美点となることもあるのですが、あいまい性を許さない学問的な論考ではそれが最大の欠点になります。

私のこの講演を聞いて下さっている皆さんの中に、外国語が得意だから、外国の人に日本語を教えてやろうとか、あるいは翻訳を一生の仕事にしようと考えている方がいたら、よほどの覚悟、よほどの決意で職業を撰んで欲しいと思います。私が大学の国文科の学生のころ、私より一年上の英文科の上級生がいました。ところが彼は、国文科の私たちよりも国文法について確かな知識を持っていました。そのわけを訊ねたところ、英語を教えようとする者が、国語がわからないでどうするか、と叱責されました。こんなことは、私が言わなくてもよく承知されていると思いますが、老婆心と思ってもらえれば幸いです。

話を先へ進めますが、本部になぜ会員名簿がないのかは、あらためて言うまでもないでしょう。特高警察は組織を踏みつぶそうとする時、指導者の拘束とともに組織の全体を把握できる名簿を押収します。昭和十八年夏、名簿はその時点で失なわれたと考えてさしつかえないでしょう。

だが、名簿がないからといって私はあきらめたわけではありません。それは、名簿がなくても、里村の書いた作品や里村と接点を持つ者、つまり、周辺の人々の文章やその証言によって真実に迫ることができます。しかし、注意すべきはたとえ里村本人の書いた事柄でも、それは里村がどの時点でどんな環境の下に、だれに向かって言った言葉であり描写であるか、そのことを抜きに真実に迫ることは不可能です。文学作品は歴史的・社会的な産物だから、書かれた時代の空気や社会状況や政治の現実などを無視しては、作品の解釈も理解もできません。文学はそれほど厄介なものであり、その書き手もまた厄介な存在なのです。それゆえにこそ、文学は「人生の教師」とも言えるわけです。

## 創価教育学会関係の作家たち

時間が残り少なくなったので、急いでつけ加えます。それは、里村欣三の他に、創価教育学会の会員、もしくは会員と目される作家がいなかったかどうかということです。

創価教育学会が出していた『価値創造』の出版広告には、創価教育学会会員著作選として、国富倫雄『戦場の呼声』・新井紀一『戦陣子守唄』・国原登『学校の父』以上大都書房と書かれ、つ

づいて別の出版社（六芸社）の帰還作家純文学叢書というタイトルで、竹森一男『黒竜江』・里村欣三『兵の道』と書かれています。これは前の三人とあとの二人が会員と会員でない者というようにも受け止められる掲載の仕方ですが、帰還作家および出版社の別を分けた掲載方法で、この五人は会員であるなしの区別ではないとみることもできます。私個人は後者と判断しているのですが、判然としないものは断定しないし、してはいけないと考えることから、まちがいのない会員は前の三人と思います。しかし、計五人を見渡して言えることは、作家として著名な人は、新井・竹森・里村の三人だけということです。

新井はしかし、新井紀一というより筆名の別院一郎と言った方が名を知られているわけで、彼はプロレタリア文学の高揚期に反戦作家として知られていましたが、日中戦争開始後は別院一郎という筆名を多く使っていました。この新井の戦時下の著書には、たとえば『敗走千里』のように、ベストセラーになったものもありますが、私の知るかぎり作品として価値のあるものは少く、彼の著述の中では『揚子江の魚』がもっとも優れていると思われます。

一方、竹森一男は、広告に『黒竜江』が掲載されていますが、これは彼の全作品の中でも代表作といえるほどの名著です。

私が『黒竜江』を知ったのは戦後二十年ほど経ったところで、竹森が創価教育学会とかかわりがあるとはまったく知りませんでした。しかし、『黒竜江』が、日中戦争下の作品として立派なものであることは、一読してよくわかりました。わかったというより感動したと言うべきですが、以後、私はこの作品の中の一節を、自著の中で繰り返し引用させてもらいました。それは、歴史家の多くが、「十五年戦争」という言葉をいとも簡単に使うのに異和感を覚えているからです。むしろ私はあの戦争を、十五年戦争と考え、日中戦争を太平洋戦争とは別のものとは思いません。日中戦争の延長上に太平洋戦争があったと考えます。しかし、いわゆる「満州事変」から日中全面戦争までの、約六年間は、庶民大衆にとって、戦時という概念からは遠く離れた、少なくとも「平和」な時代であり社会であったという感覚が生きている時代でした。そのことをここで詳述するわけにはいかないので省略しますが、全面戦争に入る前の、東京銀座の風景を描写した『黒竜江』の一節は、群を抜く見事な時代の捉え方をしています。私はそれを利用させていただいたわけですが、しかしそのことよりも、ノモンハン戦争下に召集された竹森が、満州北部の国境で、「平和」について述べている一節に感動しないわけにはいきませんでした。

そこには次のような言葉があります。

「国境が無防備状態になって、——例えば隣家の畠と畠のやうに、境はあっても争ひがないので、垣も柵も要らぬ、お互ひはにこにこして、お互ひの家庭の幸福を念じながら援け合ふ、といふ風になれば、いいと思ふのであります。つまり、国境といひながら、このやうに美しい自然の中で、戦争がなく、平和に生存できたら、と思ったからです。」

この部分は作品の主人公が上官に向かって言った言葉です。春の黒竜江岸はこの引用文の前にも書かれているように、「春から秋にかけて、次々と花が色とりどりに咲き匂ふ」し「夏は涼しいし、秋の紅葉はいい」ということです。これは主人公たちの一隊が、「匪賊」と呼ばれる敵を追って

る途中での会話として書かれているものです。

もちろん、この作品は作者自身の体験をもとにした小説ですが、この時代、こんな表現は許されないことも事実です。私がこの作品に感動したのはこういう部分で、これが創価教育学会の理念そのものと気がついたのは十数年を経た後でした。

竹森にはほかに、『国境の鶏』や『マライ物語』と題する従軍記などがあり、『黒竜江』に次ぐ立派な作品ですが、残念なことに竹森一男の研究者は、これまでに一人もいないのです。里村欣三は誤解されて無視・非難を浴びたのですが、竹森はそうではありません。にもかかわらずなぜそうなったのか。それは終戦直後に、戦争下の、とりわけ戦争を主題とした文学は価値ゼロという批判が、進歩的といわれる一部の評論家によって言われたことが原因です。そのことから研究者たちは、うかつに戦争にかかわる文学に取り組むのは危険と思ったし無駄と考えたのでしょう。私はそういう考え方に異を唱え孤立を覚悟で、もっぱら戦争下の文学に取り組んできたのですが、意図したことの万分の一も達成していないことを残念に思っています。

戦争を主題とする文学ははたして価値ゼロであるか、里村や竹森の作品（註・『黒竜江』は、戦後、「リバイバル外地文学選集」大空社刊の一冊として復刻されています。解説は私が書きました）を読んでいただければ理解されるでしょう。

もはや時間がなくなりましたが、フィリピン戦場での里村の言動については『従軍作家里村欣三の謎』にわづかばかり書いたので、機会があれば読んでいただきたいと思います。彼の満州での放浪については、いつか書くつもりでいます。また彼が、どうして自首しなければならなくなったのかということや、プロレタリア文学の退潮以後、彼がどんな作品を書きどんな生活を送っていたかなど、今日、深く立ち入らなかった問題について、いつか機会があれば、御話ししようと思っています。ただ、どうしてもわかって欲しいのは、里村欣三や竹森一男という優れた作家がかつて創価教育学会に存在したということです。

最近、ある編集者が、「過去をふり返らず、未来を目指す」ということを書いていましたが、私は、「現代という時代は過去の累積である」と、これまでに何度も繰り返してきました。歴史観・歴史認識を持たない人が殖えつづけています。「過去」に教訓を求めずして未来を切り開くことはできないというのが私の変らぬ主張です。「過去」に学ぶことで自らの生き方をきめるような人生を送って欲しいと願って私の話を終ります。



—編集部より—

このたび2010年3月に、里村欣三の生地である岡山県備前市日生に「里村欣三顕彰碑」が建つことになりました。碑には、里村の「この世のすべてが嘘であっても、私は人を信じて生きていきたい」という言葉が刻まれ、横に、次の説明が付けられています。

「里村欣三顕彰碑

本名／前川二享（一九〇二—一九四五）  
日生町寒河生まれ、福河小学校から関西  
中学に進む。労働運動に没頭。徴兵忌避  
し満州を放浪。帰国後プロレタリア作家  
として活躍。後に中国戦線に従軍。マレ  
ーシア、ボルネオ、フィリピン方面で、  
従軍作家として名声を得たが、報道班員  
として唯一人戦死。



評論家高崎隆治は、同人を『自由』の意味を追い求めた文学者と評し、『だれにも優しくだれにも親切で、はかり知れないほどの善意に満ちた彼の作品は、美しい自然に恵まれた彼の故郷に生きる人々の共有するものであろう。』と語る。

同人を郷土の誇りとしたい。

代表作『苦力頭の表情』『河の民』

二〇一〇年三月  
里村欣三顕彰会建立」